

新島襄のこころ——イメージを通して—— (4)

首都ワシントンの新島像

竹中正夫

米国の首都ワシントンのマサチューセツ

ツ通りとウイシコンシン通りの出あう高台に巨大な聖堂がそびえている。それは、米国の監督教会の主教座のあるワシントン大聖堂で、別名、「聖ペテロ・聖パウロ教会」とよばれている。このゴシックの大聖堂は、

一九〇七年に起工され、一九七六年に完成した。西欧のキリスト者たちがいかに壮大な気宇と強靱な忍耐力をもつて会堂を建築してゆくかということを物語っている。ワシントンの聖アルバンという小高い丘にそびえるこの大聖堂は、パトマク河畔から見わたされ、北米における最大のゴシック聖堂の一つとして広く知られている。しかし、この大聖堂の中に新島襄の立像彫刻が

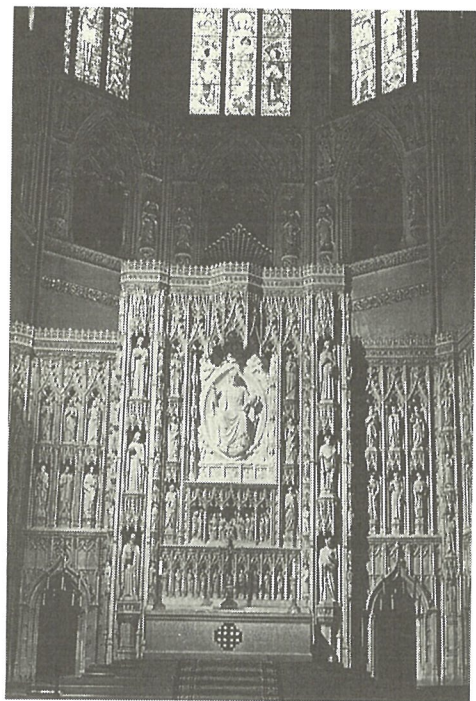
あることはあまり知られていない。

一九五一年にわたしはこの大聖堂をはじめて訪ねた。そのとき、すでに中央聖壇の後背部の飾り壁 (reredos) の右端に新島襄の彫像を見て深い感銘を覚えた。その後、一九七五年に出版された『同志社一〇〇年』と題する写真集には、その写真が掲載されたが(二五八頁)、どういう経緯をへて、いつこの像がおかれるようになったかについては現在までに明らかにされなかった。

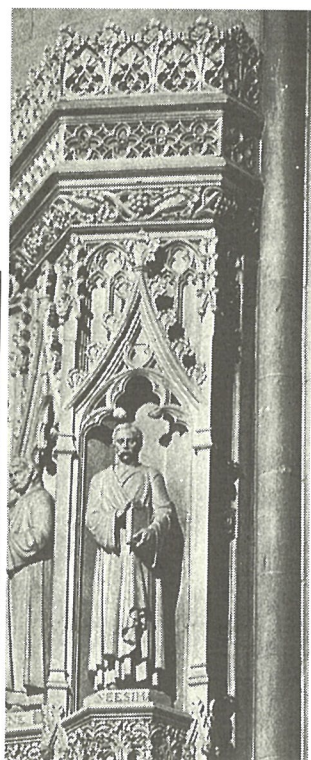
今回の訪問のうちに、資料室を訪ねたが、関係者は休暇中であつた。そこでわたしは、資料室長に手紙を書いた。昨年一月末に資料室長リチャード・ヒュレット博士から新島像についての詳細な資料とともに手紙

が送られてきた。それによると、新島像がワシントン聖堂に置かれるようになったのは、一九三五年であり、その記録が同年秋に刊行された同聖堂の機関誌 (Cathedral Age) に記載されている。(二六頁—二四頁)、中心部右にはアブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデ、エリヤなどの旧約の人びと、左には、マルコ、ルカ、テモテ、マリヤ、マルタ、ヤコブなどの新約の人びとが配され、さらに外壁面に歴代の聖徒たちが八人づつ一六人ありその中に新島襄の像がある。選定したのは、当時の大聖堂の主任司祭であつたジョージC・プラテナール司祭で、像を刻んだのは、ボストンの彫刻家アンジェロ・ラウディである。彼はモデルなしにこれらの彫刻を製作する苦心を語っている。説明には、こう記されている。「新島襄、かれは祖父伝来の刀を聖書にかけ、自らを献げて同志社大学を設立し、キリスト教による人民教育にあたつた」

(大学神学部教授)



祭壇正面



右・上部にある新島像